

〈研究ノート〉

ジャマイカの文化精神医学革新者 F. ヒックリングと 心理歴史誌的文化療法について —参与経験をふまえて—

宮坂 敬造

Abstract

This research note focuses on ‘psychohistoriographic cultural therapy (PCT)’ on the basis of the author’s participatory observation over the process of a PCT seminar held in Kingston, during Feb.12-14, 2020. PCT was originated and developed by the late Jamaican psychiatrist F.W. Hickling M.D., the innovator of the field of transcultural psychiatry from the third world Black Jamaican perspective, with whom the author had three intensive interviews in Montreal and Kingston.

PCT’s 5 phases are described from a participant standpoint with reference to the above PCT seminar process as one of the PCT examples. By capturing PCT from cultural anthropological perspective, conspicuous features of PCT are analyzed on the basis of the author’s participatory observation.

Keywords : 心理歴史誌的文化療法 (PCT)、ジャマイカの黒人精神科医フレデリック・W・ヒックリング医博、西欧精神医学批判の見地からの革新性、参加者を熱中させる要因

1. はじめに

講演者がレゲエの王ボブ・マーリーの PPT スライドを出した—すると、レゲエバンドの音楽が流れ出したが、迫力ある大音声で歌いだしたのは、なんと格調ある演説をしていた講演者自身、すなわちフレデリック・W・ヒックリング医博そのものであった。2020年2月15日の午後、ジャマイカの首都キングストンのモナ地区にあるウエスト・インディー大学講堂で開催された文化社会精神医学の国際研究大会 [5th Annual Global Mental Health Conference “Decolonizing Madness: The Resolution of Complex Trauma”] の研究発表で的一幕のことであった。

それまでに同医博がレゲエを歌い出すことがあるなどの噂は聞いていた—また、2015年の6月はじめにカナダ・モントリオールの同地のユダヤ系総合病院ホールで開催された〈芸術と文化精神医学先端研究会後のセミナー〉では (マッギル大学社会文化精神医学部門研究所 Division of Social and Transcultural Psychiatry およびユダヤ系総合病院内地域家族精神医学研究所 Institute of Community and Family Psychiatry 主催)、同医博主導で研究者向けに 20 名程度の〈心理歴史誌的文化療法〉 psychohistoriographic cultural therapy (以下、PCT と表記) 演習セミナー・ワークショップに筆者も実地に参加する

ことができた。そこでは一種の心理劇作成の過程が進行し、歌を歌いダンスを踊ったのであった。しかしながら、文化精神医学や医療人類学の学会発表講演中に、研究者である発表者自らがおおいに歌唱し、また自作の詩を朗読するという迫力あるパフォーマンスを披露するといった事態は、国際学会であってもそれまで経験していなかったし、まったく予想していなかったため、驚くとともに、筆者にとって極めて印象深い経験となった—その時一瞬、北アメリカの黒人キリスト教教会での礼拝中、黒人霊歌的合唱とダンスが始まったときのことを思い出したのだが、同医博の医学生時代以降のキャリアの大きな幅を知れば、何の不思議もないということが、改めて振り返って思い起され感得したのもであった。



写真1 講演するフレデリック・W・ヒックリング医博
(2020年2月15日、キングストンのウェスト・インディー
大学、撮影・筆者1)

フレデリック・W・ヒックリング医博は、学生時代以降ながきにわたってダンスや歌謡と詩作を行い、それらを総合する活動としての大衆演劇活動や音楽バンドのプロデュース（主として舞台主任）をおこなっていたからだ。その演劇活動経験が、つづいてジャマイカで唯一の精神科病院での芸術療法的治療開拓というかたちで展開継続され、結局、PCTや〈心理歴史誌的短期心理療法〉psychohistoriographic brief psychotherapy に結実していったのである。

1.1. フレデリック・W・ヒックリング医博に感じた異なる文化的身体性

ジャマイカの黒人精神科医フレデリック・W・ヒックリング医博（以下、同医博またはFWHと表記する場合がある）に、モンリオールとキングストンで筆者は3回にわたって接し集中的にインタビューする機会をもったのだが、いずれの面会の場合にも、精神医学者であり精神医療実践の臨床家であるという印象に加えて、極めて陽気で演劇的な所作も示したりし、関東圏、日本語環境で育った筆者とは、文化的身体性が極めて異なっているということを強く感じた²。同医博の上述の講義場面で筆者が驚いたのも、この文化的身体性の違いであった。

文化的差異が立ち上がってくる場面とは、文化背景の異なる自己と他者、人々が、とりもなおさず、接触状況 contact situation に置かれている場面である。共に居合わせた場面で、両者が文化背景の違いに気がつくことから、P・ラビノが指摘するようなく間文化

的>隙間の空間が徐々に立ち上がってきて、理想的に進めば、両者が、その空間の中で互いの文化の翻訳が部分的にもできるようになり—トランス文化の位相がたちあがり—、相互理解が進むようになっていくのである（もちろん一筋縄では進まず、互いにとんでもない誤解に基づき大喧嘩することもありえるが、その時点でお互いの誤解に気が付いて、また、次の段階での相互理解に進みうるのである）³。グローバル化がますます進む現代世界では、異文化同士が混淆し、部分々々のハイブリッド化が増幅してゆく。そうした混成化状況下でありつつも、自他が接触し、ちょっとした相違に気が付いて向き合う事態がその都度、新たに生じるのである。人文社会科学の学際的分野であり、さらに文理融合的な色彩を持つ文化人類学が、異文化を受け止める現場の場面も、この接触状況場面に他ならない。筆者と FWH の出会いの場面も、まさにその接触状況場面の一類型であり、筆者はまず文化背景の異なる身体性に注目せざるを得なかったのである⁴。

1.2. 〈心理歴史誌的文化療法〉PCT は西欧の集団的芸術療法を土台に改良したものとする見方への疑問

F.ヒックリング医博士は、心理歴史誌的文化療法 PCT をジャマイカで開拓したことによって、文化精神医学革新者となった。一つには、黒人系ジャマイカ人たちのところに潜んでいる<集合的>記憶を彼らの土地の文化の核であるエスノヒストリーを掬い上げることによって、社会精神医学的地域療法に<文化>療法の次元を加えたからである。また、一つには、黒人系ジャマイカ人を 500 年以上の長きに渡って、人種主義的な政策によって植民地化し、また、今日も形を変えたポスト植民地主義的状况を漂わせている西欧白人社会を見据え、PCT の実践成功例を通じて、西洋白人社会の精神病理である<人種主義妄想>を文化精神医学の見地から診断するからである。

彼の開拓した PCT は、例えば、創造的芸術療法の技術・技を借りた集団療法である、と、一面説明されることがある（FWH, 2010:137）。ただ、そこで上演される劇の台本作成過程で、歴史誌編成研究法をつかうが、その資料として文字記録資料ではなく、口承伝承や具体的逸話の記憶を材料にする点、そして、そこから参加者の人々の集合的歴史記憶の地図を作成する点、その地図から上演台本を考える点がジャマイカ独自に発展した、とされる。

この説明は確かに分かりやすいが、上記に述べたような文化背景の異なる強烈な身体性という様相を強く感じた筆者は、この説明だけでは不十分で、何か抜け落ちているように感じるのである。

では抜け落ちているものをどのようにすれば掬い上げることができるのだろうか—一つは、F.ヒックリング医博士の自伝的生活史を主としてインタビューから聞き出し、それを医博士の多数の著作物と照らし合わせ、そこから、彼が示す身体性の幅と核を分析していく方策である。その際、<文化的身体性>という概念を文化人類学的に明確にしておく必要がある。このやり方を筆者は構想し検討しているが、本稿ではそれを措き⁵、彼の開拓した PCT の特徴を、参与観察経験からあとづけるというやり方によって以下で検討してみたい。

2. 〈心理歴史誌的文化療法〉PCT のあらまし—参与観察から考察する

PCT は、ジャマイカの独自色が色濃い一種の集団心理療法である。筆者は、2015年6月はじめの半日、および、2020年の2月に研究者や療法家の研修の目的で開催された3日間

のワークショップに参加する機会をもった（後者はジャマイカにおける第2回目の研修会であるが、海外の人間の参加を初めて許可する研修会となったので、筆者をふくむ参加者のおよそ半分は海外の研究者や療法家であった）。この療法は、西欧の近代精神医学の枠組みのなかで発達した芸術療法を下敷きに行っている一面があるため、その一面では患者や参加者が演劇を演じる演劇療法の趣が感じられる。とはいえ、現地特有の太鼓や楽器を使い、踊ったり歌ったりするプロの俳優・音楽演奏者も参加しているので—現地の精神保健支援看護師の夫でもあったが—ジャマイカ色が濃厚であった⁶。

以下ではこの参加経験を簡単に記し参照しつつ、PCT の構成成分・段階・過程について素描していきたい。

2.1. プロの俳優ドラマ奏者をふくむ参加者の顔ぶれ

まず PCT ワークショップ開始後に PCT のあらましについて講義をうけた。その後、参加者の自己紹介がはじまり、このワークショップに参加した理由や期待することなどが手短かに語られた。その後、昼食をいっしょにとる。この演習セミナーはほとんどが研究者か医師やソーシャルワーカー、看護師等の医療従事者、医学部学生たち（精神医学専修でない学生もいた—女性のほうが多かった）であり、いわゆる患者が参加したものではなかった。とはいえ、PCT の基本成分が骨格にあったものだった。参加者数は、27 名であったが、そのなかには、FWH（彼は数時間単位で場を離れることもあった）、FWH の共同研究者として小学生への PCT 応用の研究協力をずっとつづけてきたマッギル大学医学部 Jaswant Guzder 児童精神医学・精神分析教授、彼女の博士課程学生として PCT の応用事例のイムプリメント研究をおこなってきたマッギル大学 Institute of Community & Family Psychiatry, Cultural Consultation Unit 研究員 Nicole D'souza 博士も参加していたが、この2人は、外国からのカナダ人ではあるが、ジャマイカで PCT 実施時や PCT ワークショップのいわば常連メンバーであった。PCT には主導療法士が一人配属されるのだが〔集団療法過程で介入が必要とみたときは集団過程に介入する〕、この PCT ワークショップでは、ジャマイカ・キングストンで精神医療を実践し、FWH の協力者でもある Geoffrey Walcott 医博が主導療法士役を務めた〔写真 2 において立っている男性〕。PCT には副療法士がふたりさらに配属されるが、今回は、黒人女性看護師ひとりがその役をつとめた〔写真 3 で小さい白板に文字を書き込んでからそれを見ている女性〕。これらの療法士役は現地のスタッフとして、ワークショップ参加者たちに介入もふくめたかわりをおこない、集団過程を円滑にすすめていくわけである。さらには、プロの俳優・ドラム演奏者が加わっていた。その黒人男性は、副療法士の夫でもあった。PCT は 1978 年にジャマイカ・キングストンにあるベレビュー病院 Belleveu Hospital で社会劇としての集団療法を FWH が実施したことに始まるが、その当時は、作業療法に従事していた 250 人程度の入院患者をはじめとし、医師・看護師助手、精神科助手を交え、さらに、音楽演奏家たち、踊り手たち、演劇学校学生たちなど、総勢 300 人を超す規模でたびたび行われていた。この集団療法過程に、1970 年代から盛んになったジャマイカの大衆芸能や演劇ダンスの若い担い手たちが参加していることが特徴であった。筆者が参加した PCT ワークショップにプロの俳優兼ドラム演奏者が加わったのは、このような背景がある。彼は他にもタンブリンを三点ほど持ってきたが、これは、参加者が、自主的に取り上げて打ち鳴らすということが多かった。

27人の参加者のうち、上記6人を除く人々が、本当の意味のワークショップ応募参加者であった。

その21人のうち、ブラジルからの免疫学研究者を経て精神科医（精神病院の外の路上で、患者たちがほかの周囲の地域の人々と共に、シェークスピアなどの演劇を上演するという広義の演劇療法を主催）、かつてはトロント大学病院に勤め、今は、個人診療の精神科医（もともと中国系香港出身でカナダに移民した）、現在カナダの大学の先生をし個人心理療法も行う女性（元々は西アフリカ出身で、親戚に病気治しの呪医がいる）、アメリカの大学で精神医学を教える黒人女性教授（自分のルーツのガーナの親戚〔族長筋の家〕を毎年訪れる）など、ジャマイカ国外からの研究者専門家たちが参加していた。

他には、ウェスト・インディー大学の医学生3人で、女性（黒人系）と男性（肌が褐色だがスペイン系等の白人にみえる）がジャマイカ出身。もうひとりの女子学生は、バルバドス島からの留学生だった（青い目をしているが、肌はやや褐色）。中年男性のジャマイカのソーシャルワーカー（肌が褐色だが白人にみえる）、および黒人系女性の看護師など医療関係者6人、若い黒人系男性精神科支援助手、中年の黒人系女性の社会福祉学者などであった。

2.2. 参加者が次第に熱中していく過程—参加者の心に生じる中心求心性

つぎに本番PCTのいわば準備段階があり、そこでは、集団心理療法過程のひとつとして位置づけられるエンカウンターグループのセッションのようなやりかたで、参加者が少しく知り合い、緊張をといて和らいでいく過程がみられた。息を整える呼吸法をやったり、体操を用いて体をほぐす身体動作などをする。体を動かして、お互いに関わる関わりを強めていく段階である。ドラムがなかったので踊る人とか、主副の療法家を除く25人の参加者が小人数にわかれて相互作用する傾向があった。

それが終わるとPCTの次の5段階が順次行われた。

- 1) 第1段階・心理歴史誌的な大集団分析—まず、PCT 主導者の黒人系精神科医が大きな白板のなかほどからマジックマーカーでタイムライン線を水平に引いた。



写真2 2020年2月12日、PCTワークショップの第一段階で、白板にTime-lineを引き、参加者の反応を引き出しながら、まとめあげていく主導療法士、撮影・筆者

そこに、15世紀から現代まで、時代区分点を書き込んでいく。そして参加者の声をつのり、コロンブスの来訪、カリブ海地域の征服にはじまり、ジャマイカ共和国独立など、想起された具体的事件をあげてもらい、主導者がタイムラインの時期区分ごとに事件を白板に書いていく。白人による過酷な人種差別を伴ったジャマイカの植民地の歴史の挿話や歴史的登場人物がとりあげられる傾向があった（鍵となる歴史的事件）。

タイムライン線の上方には、まとめとして白人による植民地主義、人種差別、それに対応して下方には、奴隷、搾取など一連の事件をまとめ、語句が、上下が対となる組にし、その組の対句が葛藤相反する両極的語句になるようにまとめていく。こうして、タイムライン線への心理歴史誌の書き込みが終了する。これをさらに、みやすく図示する（心理歴史誌図表）。この場でえられた内容は、以前からこれまで PCT が行われてきた時にえられた心理歴史誌図表と似通ったものになっているが、それが、このワークショップの現場の集団過程の中で得られたという点が重要であると思われた。その場で得られる過程で、各自の心のなかで、共通のアイデンティティが（かつての奴隷の子孫で西欧の植民地主義に苦しめられた末裔）たちあがり、それが集団として中心求心性をもってまとまっていく、という現場性が一番大事な力になるからである。さらに、参加者が挙げる事件や地域の逸話や歴史譚が抽象的概念表現ではなく、身体で納得するような生きた具体例で表現されていて、それがほかの参加者の血の通った反応を呼んでつながっていく、という点も心的中心求心性を強める—参加者は、身振り手振りを動かす身体言語の動きがめだってくる。

なお外国からのワークショップの参加者は、知識人であり、なおかつ、南米やカナダでの人種主義を肌で感じている非白人が多いために、黒人ジャマイカの負の歴史の心理歴史誌的な大集団分析の過程の進行や内容に対しては違和感がなかったということであった（筆者がおこなった短い事後的インタビューによる—たとえば、外国からの専門家の参加者は、移民一世と二世のインド系は、世代は異なるものの、顕示的潜在的な人種差別状況を長く経験していたし、移民一世世代の香港系も同様の経験があり、北アメリカからの移民一世の黒人系の医療系専門職ふたりは、西アフリカの出身地と毎年往復し、シャーマン治療者などのアフリカの伝統文化に肯定的であった）。ジャマイカ出自ではないために、まったく認識や感性が一致しているわけではないため、ジャマイカの参加者たちとずれや差異があるわけではあるが、それが集団内でくいちがいが絡んで葛藤に結びつくようなことはない。—そうしたくいちがいの差異はありつつも、ある枠の中で保たれつつ、葛藤にまで表面化することのないように抑えられているわけである。ジャマイカからの参加者が多いときには、くいちがいは患者と医療者、階層差が主たる差異の要因であるが、看護師よりもその助手たち、若手の演劇俳優やダンサーや音楽家たちといった、より周縁的位置にある人々が大活躍する集団療法過程となるため、そうした差異は取り払われコムニタス状況が生まれ、参加者集団全体の心的中心求心性が高揚し、熱を帯びた展開となりうるのである。—ベレビュー病院でより大規模の人数でおこなっていた PCT では、あるとき、20年来の入院者でここ4年は緊張病的身体症状で固まりつづけていた患者が演劇上演中の人のセリフに急に反応し、会話を発し、急速に緩解していったという治療成功例も生じた（FWH, 2007a:116-117）。ジャマイカ黒人系の精神病発症の根の元凶要因は、西欧の年来の人

種主義的妄想に拠る西欧精神医学にある、と判ずるのが FWH の文化精神医学革新の所説であるが、英国移住後発病し帰国したこの患者の治癒例はその雄弁な証拠になるものであった。なお、F・ファノンの反西欧精神医学思想の影響をうけカリブ海地域のエピステーメを西欧のそれに強く対峙させた FWH ではあるが、心理歴史誌を引き出す集団過程を多々繰り返すなかで、PCT の実施結果として、西欧精神医学が隠す人種主義妄想を経験的手続きによって検出する、という作業を深めていった点も特記すべきであろう。

- 2) 第2段階・劇のスク립ト作成作業—手を挙げて当てられた参加者が台紙に、思いつく言葉や文言、詩的な言い回しを次々に書いていく。それらの言葉を組み合わせたり、並べ替えたりしながら、ひとつの歴史的物語になるような文章を組み上げていく。これを書く係は黒人女性副療法家であった。また、詩は別の小さな持ち運び白板に書かれたりした。

この小さい白板をめぐる参加者からいろいろな議論が出され—たとえば、植民地支配者の彼らの力の源泉は何であったのか、と質問がなされたり、あるいは、これまで黒人ジャマイカの負の歴史についてはあまり考えたことがなかったが、今日このワークショップに来てみてそれを考える重要性に気がついた、といったコメントがあった—。それを副療法家がまとめて台本原案にまとめていった。ジャマイカが被ってきた負の歴史を劇として上演するという運びとなった。

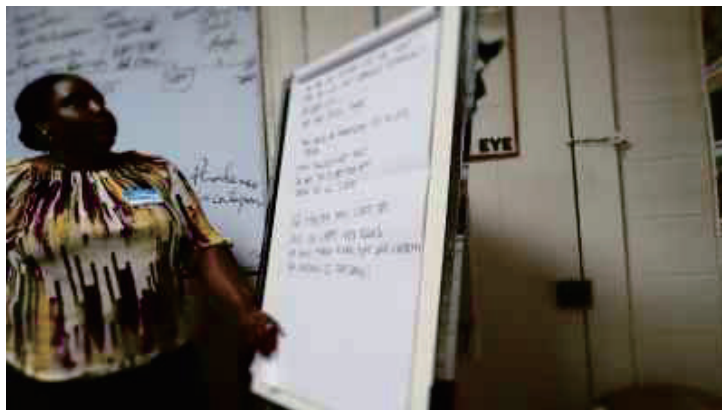


写真3 2020年2月12日、PCTワークショップの第2段階で、小さい白板に参加者から提案されたセリフや疑問、詩文などを書いていく副療法士。撮影・筆者

2.3. 上演設定、リハーサル、劇の上演、事後の話し合い

- 3) 第3段階・劇の上演設定、リハーサル—兵隊帽などの衣装やカスタネット系の打楽器なども用意されていた。参加者はリハーサルを通し、植民者側となったり、奴隷側となったりしながら、物語の一部を変え、演じ方を変える相談をしていった。そして最後に簡単な歴史劇のかたちにまとめあげ、劇を完成までもっていくのである。なお、白人系の

参加者が奴隷側を演じ、黒人系の参加者が植民地支配者側を演ずるなど、心理療法的にバランスある配役が行われた。⁷



写真4 2020年2月14日、PCTワークショップの第3段階で、参加者が台本を手にしながら、上演リハーサルと打ち合わせをおこなう場面。撮影・筆者



写真5 2020年2月14日、PCTワークショップの第4段階で、上演がおこなわれた場面。撮影・筆者

- 4) 上演—通しで参加者全員による上演が行われる。筆者が参加した研修会では、楽器を叩き歌唱を演ずるプロの俳優兼ドラマーのファシリテーター役の効果が大きかった。全体としては、ある程度以上に熱中して、試行錯誤しつつも、上演を完遂した充実感があるという印象であった。
- 5) 第5段階・上演後の評価—参加者たちは自分が経験した幅や感想を語り合った。また、療法の展開について疑問点があつて回答助言を求めた参加者もあつた。全体としては非常にいい経験ができたという感想が多かつた。また、筆者が事後、個人的に聞いてみたところでは、中年男性のソーシャルワーカーは精神科医との役割関係の調整に関してジャマイカの仕事で葛藤を感じているところだったが、ワークショップに参加してみて、その葛藤をもう一步深めて考えてみるよいきっかけとなつたということだった。



写真6 2020年2月14日、PCTワークショップの第5段階で、上演終了後に、参加者たちが、事後評価を語りあう場面。左から4人目がFWH。撮影・筆者

3. 考察

ジャマイカの精神疾患の人々や看護師とその助手たち、精神神経科助手、ソーシャルワーカーたち、さらには踊り手、音楽演奏者たち、演劇人俳優たちを交えて、共通の歴史的集合的記憶を賦活させ、集合的中心求心性を高めつつ、それをもとに、全員で劇の台本を考え合わせ、そして合作した劇を全員で上演する、というのがPCTのあらましである。

上述したように、PCTでは、ジャマイカの黒人系の人々の心の底に横たわる心理歴史誌の具体的集合的記憶を集団療法の過程の中で引き出していき、というのが各参加者の心的中心求心性を強めるために大事なポイントとなる。

この点を参与観察から質的に確かめる切り口のひとつとして、参加者の熱中度がたかまっていく様子や言行の観察と、事後に参加者にインタビューして熱中の推移を推し量るやりかたが考えられる。

3.1. PCTの過程で熱中にむかうジャマイカの人々の文化的身体性

この集団治療集団の中には、主導療法家と副療法家が配され、彼らが触媒となって、ほとんど参加者が次第に熱中していくような展開が生み出されることがある。

参加者がジャマイカの人々だけの場合には、多数の患者をふくむ300人を超える大規模なPCTの場合であっても、非常な熱中が高まっていくということであるが、なぜそのような熱中することができるのであろうか。様々な要因が絡み合うとはいえ、参加者の人々——すなわち、黒人系ジャマイカの人々——の中にその熱中を生み出す力が、そもそも彼らの文化的身体性として、宿っているということも一因ではないか。社会人類学者V・ターナーは、境界相 liminality に現れる象徴的儀礼のさなかに流れる<フロー>[熱中して流れすすむ様相]に注目し、境界相ゆえの熱中現象ととらえたが、⁸ フローと儀礼、フローとPCTという角度からさらに掘り下げて検討する必要がある。さらには、また、冒頭で述べたようにジャマイカの文化的身体性に焦点をあてて再検討することもぜひ必要である。FWH その人がダンスを踊り、歌を歌い、詩作をして吟じ、それらに自分の身体が呼応し

て反応し、演劇的身体を PCT のなかに浸り込ませる人であったのだから。

また、ジャマイカで創成されたラストファリ [ラストファーライ] 運動にみられるように、レゲエ音楽を演奏し、儀礼を行い、討論を深く掘り下げ、深い次元での共同意識に達するといった技法がある。この点も PCT で行われている議論の繰り返し循環による reasoning circle の獲得という技法（単なる知識レベルだけでなく、ジャマイカの文化的身体性に裏付けられている）と相関的であると思われ、そこに潜む身体性の問題へと検討を掘り下げる必要があろう⁹。本稿ではまだ深く掘り下げることまでなしえないが、注 9 で触れたような今後の方向を課題として検討していきたい。

3.2. 文化人類学からみた PCT の境界性の位相

筆者の文化人類学的見地からみると、PCT は、葛藤に係る一種の修復儀礼にも該当すると思われた一人種・階層・精神疾患患者など社会的スティグマをもつ異質で多様な社会的小集団が、葛藤を孕みつつ、アイデンティティのよすがを共に築く社会文化過程として位置付けられうると判断したのである。

FWH は第三世界のジャマイカの社会文化背景を基盤にこの運動を作成・開拓し葛藤統合の技法にまで改訂したのだったが、これが先進国にも変形を施して適用可能かどうか、実験的研究をいままで北米で 12 回的に試みていると述べている。たとえば、2010 年にカナダ・モンリオールでおこなわれた 2 群の集団への PCT においては、ケベック州への外国人移民に対する理にかなった配慮 reasonable accommodation というテーマがまず与えられたが、このテーマのもとでは、フランス系ケベック州民と、もともと移民背景をもつ在住者との間で潜在的緊張感が生まれ、両者をつなぐその場のよすがが生まれず、中心求心性の獲得がうまくできないという結果となり、このときの PCT は成功とはいえなかった。しかしながら、緊張の一部は討論をよび、そこでの討論がもし深まっていけば、一時的な亀裂をともしつつも、なんらかの共通の接地点に到着した可能性も考えられると思われた。もともとの葛藤の拡大で決裂がみえた危機のときに、修復の儀礼が立ち上がり、それによって決裂が回避され、再度なんらかの統合の様相に至る、という可能性を見出しうるのがターナー流の人類学的儀礼論であるが、第一世界のモンリオールの状況に FWH による第三世界からの PCT が転調的に適応された上記の例の展開には、修復儀礼とむすびつく様相がほの見えると考えられるのである。人類学が焦点を合わせる危機の儀礼が、社会的地位の差が極小化されるコミュニティ的相互作用場、すなわち、境界性リミナリティの位相場に至る展開をたどるように、PCT の展開場に同種のリミナリティの位相場をみてとる接近法によって、両方をつなげる分析の方向がやどっているにちがいない。

4. おわりに

もともとレゲエ音楽バンドの集団再活性化にかかわった経験から FWH が精神科病院の入院患者とともにスタッフが行う芸術療法を集中的に改訂したものが PCT であった (FWH 2007: 14-16; 70-78; 97-105)。病院での PCT を数々試行し、成功例を積み重ねた後、病院外地区コミュニティで実施する一種の精神保健運動となっていく展開が近年みられている。不安定な心理傾向を潜在させる黒人系の小学生むけにも、描画をひとつの中心に加えた改訂版 PCT が行われているのである (たとえば、FWH et al. 2007b)。これによ

り、将来の非行を減らす副次的効果が見出され、インプリメント実証研究もふくめ、その効果を高める研究が継続的におこなわれている。—インド系シーク教徒移民二世のマッギル大学社会文化精神医学部門 Jaswant Guzder 教授はこの運動に賛同し、近年継続的にジャマイカに赴いてこのプロジェクトに関わっている。

また、FWH の死後、2023 年 10 月に出版された共著論文では (G.Wallcott, FWH, et al. 2023) ジャマイカの男子高校サッカー少年たちに対して、PCT を応用したかかわりの報告がなされている。犯罪率が世界的にみてもとても高いジャマイカにおいて、将来世代が PCT 的関わりを経験し、黒人系ジャマイカ人として未来投企しうる自己アイデンティティの再構成がなされうる点を狙いとし、高校生への PCT 適用研究が試みられている。FWH の一連の活動によりジャマイカにおける精神保健運動が拡大されつつある一例といえよう。

そもそも黒人系ジャマイカ人の精神病の治療のために開発された PCT ではあったが、FWH が第三世界の精神医学は、社会変革までふくみこまなければならないと考えて以降、人々、とくに子どもへの教育過程に PCT を適用させる試みが始まり、今日、FWH の没後も G・ウォルコット医博などの後継者によって、PCT の社会的使用の幅が拡大されつつけている。この拡大の様相の追跡調査研究することは PCT をより深く理解するために重要であるので、本稿の次の課題としていきたい。

注

- 1 ここに掲げている筆者撮影の写真 6 葉については、このワークショップ主催者からの許可を得、また、研究資料として発表の許可もえている。
- 2 例えば一時間程度のインタビュー申し込むと、“Happy!”と手短かに、しかし抑揚がある躍動的なニュアンスが感じられる言い方で、すぐさま、通常のやりとりのスピードよりもっと速い間隔とリズム返答するのであった。
- 3 P.Rabinow 1977 *Reflection on Fieldwork in Morocco*. University of California Press.
(邦訳 1980『異文化の理解--モロッコのフィールドワークから』井上順孝訳、岩波現代選書。ラビノー以後の現代人類学では、文化相対主義的多文化主義パラダイムの欠点、存在論的転換と共振する多様な存在志向の人類学によって指摘されている。この志向のもとでは、純粋エッセンシャルな文化様態はありえず、相互に影響を部分的にうけたハイブリッド系の相互作用をどうあつかうかという新たな方法が要請されている。
- 4 グローバリゼーションによって、文化の混成化が進む現代世界において、文化概念は出自土地に貼り付けてとらえるエッセンシャルな概念化はもはやありえない。世界中にディアスポラして分布する側面も強く持ち、また、グローバリゼーションに共振したり、反発・再帰したりして、絶え間なく変化する超域ネットワーク的な動態的文化概念を、現代文化人類学は彫琢していかななければならない。
- 5 別稿「文化精神医学買革新者 F. ヒックリング」で検討中。なお、筆者は手に入る FWH の文献すべてを读了しているが、文献の対応ページ数をそれぞれ掲載提示すると非常に煩瑣となるため、特に言及すべき例外を除き、本稿では余白節約のため提示しない。
- 6 ほかにも前述したように 2015 年 6 月にもモンリオールのマッギル大学・ユダヤ系総合病院で FWH が主導した半日の PCT ワークショップにも参加したが、本稿では扱う

余白がない。

- 7 主導者役のキングストンの地域精神科医 G. Walcott 医博も黒人系には見えるが、アフリカだけでなく、ポーランドのユダヤ系にも出自をたどれるということであり、白人系で青い目にみえる医学生にも黒人系の出自もあり、参加者はすくなくならずハイブリッド系であった。しかし全体的にみれば黒人系へのアイデンティティをもつということであった。なお、本調査では参加者全員の人種的アイデンティティを調べることはできなかった。やや素朴なやりかたではあるが、見た目の印象で人種的背景を推定した部分がある。
- 8 V・W・ターナーが liminality について論じている論文・著者は数が多いが、たとえば以下を参照。V.W.Turner 1977 “Variation on a theme of liminality.” In S.F. More & B. Myerhoff, (eds.) *Secular Ritual*, Van Goracum. V.W.Turner 1974 “Liminal to Liminoid in Play, Flow, and Ritual: An Essay in Comparative Symbology,” *Rice University Studies* 60/82 なお、flow の概念は、ハンガリー系アメリカ人の社会心理学者チクセントミハイ（リ）が注目発案したものだが、ターナーは、彼と共同論文も執筆している。また、FWH が sociodrama という用語で最初に実施した 1978 年の PCT を描いているが、sociodrama はターナーが用いた social drama とも似通った用語である。ターナーの場合は、<社会劇>であるが、その用語は V・ターナーが 1950 年代、ンデンプ族社会で子が成人に達する時節がめぐってくるじきに、(循環的に生じる) 夫と妻方親族間の葛藤の増幅と衝突の危険、そしてそれを修復する儀礼について調査研究して構想した社会人類学的概念であった (V.W.Turner *Shizm and Continuity in an African Society*, Manchester, 1957)。本稿の文脈では、療法参加者間の社会的政治的文化的差異からくる葛藤を扱う劇作成と上演を集団療法の中でおこなう、という意味の社会劇である。とはいえ、社会の現実事態で生じてくる衝突の連関が結局は象徴化した劇形式の系列に集約されてきて修復儀礼へと至る点に注目したターナーの着想と FWH の社会劇を関連づける余地があると筆者は考えている。
- 9 この点に関連し、ジャマイカのラスタファリ運動の宗教的儀礼における overstanding の位相到達は、興味深い。レゲエ音楽を奏で、合議を重ねるうちに深い合議の継続状態に達し、深い深層意識状態による洞察がえられることがあるが、そうした状態における洞察が overstanding であり、understanding がもっとも深まった状態を表す。FWH et al. 210 の p.141 では、FWH の〈理由付け〉は、この overstanding を齎すラスタファリの方法を集団療法過程に適用したものであると指摘されている。この状態は深い相互作用の結果、相互に到達するものだが、言語的理解だけでなく、無意識を揺り動かす相で身体的に覚知するという相互主観的身体性の相にはいりこむものと考えられる。ラスタファリ運動の一面は、人種抑圧されたジャマイカからアフリカの起源の神聖の地と捉えるエチオピアに移住しようという思想の存在であり、ここにみられる集会的中心求心性は、PCT が探るそれと同等なものである。憑依状態とは違うが、一種の変性意識状態であり、かつ、深い身体覚知を伴う。これがジャマイカ独特の文化的身体性のひとつの現れと考えられる。また、憑依現象の場合、静かに座し、あまり激しく移動する身体運動がみられないタイプのもので、憑依しつつ飛んだり跳ねたりして踊りまわるような、きわめて運動性に富む憑依状態もあり、ジャマイカの場合は、後者のタイプの身

体性と親和すると考えられる。文化身体性の特性を簡略に類型化してとらえ、人類学研究から特性表をつくり、そこからこの概念をより明確にしていく方向が考えられよう。

なお、FWH が進めた PCT 過程では、reasoning circle の形成を目標とするわけだが、そこで達せられる集団関係性は、V・ターナーのいうコムニタスであるばかりでなく、ジャン・ウリ 『コレクティブーサン・タンヌ病院におけるセミナー』(多賀茂 上尾真道訳、月曜社 2017 年) で目指されている精神病院内における相互関係性と同型であると思われる (FWH が影響を受けている F・ファノン はフランスでの精神医学研修の 1952 年の時期に、サン・タルバンの精神病院で F・トスケイエスのもとで学んでいたことも注目される。彼のもとで、J・ウリや F・ガタリが研修を受けた時期がやはりあり、そこからウリの〈コレクティブ〉の思想が展開され、また、ガタリの機械状無意識の概念をふくむ非シニフィアンの記号論の一部の発想とも結びついていると考えられる。こうした意味で、FWH のファノン経由の構想とウリの構想を比較してみる必要もあろう。

文献

FWH と関連論文は 200 あまりとなるため、本稿の文献表では余白の関係で大部分を割愛し、FWH の主著論文(第2著者の論文も含む)については以下の 13 点を挙げるにとどめた。

- Brodber E 1983 "Oral Sources and the Creation of a Social History of the Caribbean," *Jamaica Journal*, 16(4): 2-11.
- Goveia EV 1956 *A Study on the Historiography of the British West Indies to the End of the Nineteenth Century*. Mexico: Instituto Panamericano de Geografia.
- Hickling F. W.(以下 FWH と表記) 1989 "Sociodrama in the Rehabilitation of Chronic Mental Illness." *Hospital and Community Psychiatry*, 40: 402-406.
- FWH 1992 "Radio Psychiatry and Community Mental Health," *Hospital & Community Psychiatry* 43(7):739-41
- FWH 1993 "Psychiatry in Jamaica- Growth and Development," *International Review of Psychiatry* 5(2-3):193-203.
- FWH & Griffith, E.E.H. 1994 "Clinical Perspectives on the Rastafari Movement." *Hospital and Community Psychiatry*, 45(1), 49-53.
- FWH 1996 "Psychopathology of white mentally ill immigrants to Jamaica," *Molecular and Chemical Neuropathology* 28(1-3):261-8.
- FWH & Hutchinson G 1999 "The Roast Breadfruit Psychosis: Disturbed Racial Identification in African Caribbeans." *Psychiatric Bulletin*, 23: 132-134.
- FWH 2004 "From Expaintations and Madnificent Irations to DE Culcha Clush: Popular Theatre as Psychotherapy." *Interventions: International Journal of Post-Colonial Studies*, 6(1): 45-56.
- FWH 2005 "Catalyzing Creativity." In F Hickling, E Sorel (Eds.), *Images of Psychiatry: The Caribbean*. Kingston: Department of Community Health and Psychiatry, World Psychiatric Association, University of the West Indies.

- FWH 2007a *Psychohistoriography: A Post-colonial Psychoanalytic and Psychotherapeutic Model*. Kingston: CARIMENSA, University of the West Indies.
- FWH (ed.) 2007b *Dream a world. Carimensa and the development of cultural therapy in Jamaica*, Kingston, Jamaica, CARIMENSA.
- FWH, Jaswant Guzder, Hilary Robertson-Hickling, Stephen Snow, & Laurence J. Kirmayer 2010 “Psychic Centrality: Reflections on Two Psychohistoriographic Cultural Therapy Workshops in Montreal,” *TRANSCULTURAL PSYCHIATRY*, 47: 136-158.
- FWH 2020 *Decolonization of Psychiatry in Jamaica: Madnificent Irations*, Palgrave Macmillian.
- 宮坂 敬造 2020 「デザインの人類学と多元感覚人類学が繋がる新たな人類学的課題の探求—オーストラリア先住民のメッセージ・スティックから、心理歴史誌的文化療法まで—」東京通信大学紀要、No.3: 261-278.
- Rae N 1978 “A Line from the Tower of Babble: Madnificent Irations at the Bellevue Garden Theatre,” *Gleaner*, September 10.
- Walcott, G., & FWH & Christopher A. D 2023 "To Di World: Jamaican soccer, poiesis and post-colonial transformation." *Transcultural Psychiatry*, Oct;60-5:835-843. .

謝辞

本稿は科研費調査の一環として 2019 年度行った海外出張調査結果の一部にもとづいている。また、2015 年度の科研費海外調査時にマッギル大学文化精神部門の年次先端研究大会で、ウェスト・インディー大学精神医学教授 F. Hickling 医博（2020 年 5 月死去）と知り合い懇談したことが本稿のそもそものきっかけとなった。それら筆者の海外調査時に、短期客員研究員として筆者を受け入れてくださり、種々研究助言を与えてくださったマッギル大学文化精神部門所長 L. J. Kirmayer 教授、および、F. Hickling 医博による小学生への PCT 応用プロジェクトに早くからかかわり、筆者に継続的に研究助言を与えてくださったマッギル大学医学部 Jaswant Guzder 児童精神医学・精神分析教授、そして、同左教授のもとで小学生への PCT 応用プロジェクトの調査で博論を執筆し、筆者に資料を提供してくださった同大学 Institute of Community & Family Psychiatry, Cultural Consultation Unit 研究員 Nicole D'souza 博士、および一般的助言を与えてくださった Allan Young マッギル大学医療の社会研究学科名誉教授、これらの方々に感謝をささげたい。2020 年 2 月の 2 週間の期間、F. Hickling 医博とともに、筆者のキングストン訪問を支えてくださり、また、直近でも、FWH の死後出版共著論文を出版直後に添付して下さるなど、研究協力を賜ったジャマイカ・キングストンの地域精神科医 Geoffrey Walcott 医博に感謝したい。

本稿にかかわる 2019 年 9 月～10 月の 3 週間の期間の海外調査出張による研究活動に対して、こころよく同意してくださった本学村岡洋一学長に深く感謝しています。

宮坂 敬造（みやさか けいぞう） 東京通信大学 情報マネジメント学部 名誉教授